米の社會學（隨想）

東畑精一

一

嘗て日本の輸出貿易が急激に伸びて、海外諸國の脅威となつたことがある。殊に中小工業製品、いわゆる雜品の貿易が猛烈に多くなり、おまけに價格が甚だしく低廉だつたので世界をおどろかした。その頃ハンブルグで、どう云う加減であつたか、日本製自轉車一輛の代金が實に三十ライヒス・マーク（約十五圓）と云うのをぼくは見たことのあるのを記憶している。そう云うわけで、日本はソーシャル・ダンピングをやるものだとの批難が世界的に起り、國際的にもこれに對して贊否兩論甚ださかんなものがあつた。いろいろと議論のすゝむところ、遂には各國の勞働者階級その他の生活水準の國際的比較と云う問題が、とり上げられるに至つた。歷史的に生產形態などが變化している時に、物價指數の歷史的比較がなかなか厄介な問題を多數もつているのと類して、生活形態のいちぢるしく違つている兩國民の生活水準を國際的に、數量的に比較することにも極めて困難な問題を含んでいるのは當然である。實際のところ西洋の勞働者が肉を喰い、チーズを攝つているのと、日本の金持夫婦が美食に飽き飽きして海苔とタクワンの茶漬を喰つているのと、生活水準の比較をどうしてするかまた假りに比較數字を出しても、夫れがそもそも何を示すのであるかと考えて來ると、ウルサイことおびたゞしい。生活形態の差異を單純に無視して、兩者の家計支出の比較をするだけでは事態の眞相を覆うことが多いであろう。これは敢て洋の東西の間だけの問題ではない。同じ日本の中でも、都市と農村との間の比較にも屢々見られることがらである。例えば、農村では都市に比べて娛樂費が殆んど無いし冠婚葬祭費がやたらに多いと云う風に、兩者の家計調查比較でよく論ぜられたが、これも眞相をうがつにはいささか不足であろう。農村の冠婚葬祭費なるものは――そんな習慣がよくないと云うのは別個の問題だ――實は一種の娛樂費的支出と解さるべきもので、兩者を加算したものに就いて農村都市の比較も成り立つのではないかと思われる。

それはさて置き、ソーシャル・ダンピングを主題とした其の頃

の或る國際會議で、出席の一外國人が日本の家計調査の數字を見ていて、日本人ももう少し生活程度が昇つたら、米の代りにもつと麥を食うようになるだろうと云つたことがあつた。どうも此の男の言葉の調子からうかがうと、アジアの貧乏國民が常食としている米は低級品で、彼等の如き富裕な國民の食つている小麥は即ち高い生活水準のシンボルであると云うが如きものであつた。そこで日本側からは、一せいに此の質問に對して反擊的に答えられた。日本では貧乏人こそ麥食をして居るのであつて、少し所得が增さば當然に米食をなすに至るのだとの趣が熱心に述べたてられた。毛唐の日本認識も困つたものだと大抵の人々は思つた。

これはこの會議の列席者の一人からぼくの聞いた話であるが、なるほど右の限りに於ては、日本側の反擊はまさに其の通りであるし、之れに對しては何の文句もない。ただ此の西洋人の質問を――その語調から離れて、單純に其の言葉だけに就いて――このまゝで片づけてしまうのは惜しいような氣がする。西洋人の日本認識の當否など先ず別個の問題として、われわれ自身の日本認識が重要なので、そのヒントとして、これをもう一度問題にして見たいのである。

米食と麥食との代替、これだけのことに中々多くの問題がふくまれる。麥食をやめることが出來て、それに代つて米の飯を食うようになつたのならたしかに生活程度が上昇しているし、また多くの場合に之れを可能にしている所得の增加を意味していることは確かである。ぼく達の小供の頃は、故鄉で百姓は麥の多分に混じつた米を食べていた。白米飯は盆と正月、その他の祭日と云うぐらいであつたのを記憶している。近年になつて――恐らく第一次大戰後に――百姓も白米飯を、比較的常食になし始めたのではないかと思う。――ところが同じ代替關係に違いないが、若し米食をやめてパンを食い肉を攝り乳をのみ出したら、これも米食に代るに小麥食に違いないのであるが、果して生活水準、所得が降つたことになるだろうか。戰後のこの頃の頭で考えなくて、ずつと以前、戰前の狀態で考えてほしいが、あの頃に於てもこの變化を生活程度の下降とは到底云い得ないのである。むしろ上昇を意味していたと爲さねばならない。其の語調からそうでは無かつたのであるが、若しも先きに述べた一西洋人が茲に述べたような意味で、日本人も若しも生活程度が昇つたら米の代りに小麥を食うに至るだろうと云つたのであるならば、夫れは甚だ正確な判斷であり、日本認識も相當なものであると爲さねばならなかつたであろう。日本の食物論は、餘りに米の貴重論ばかりに囚われすぎているように思われる。

二

また斯う云う一條の問答を思い出す。農業經濟學界の大先輩ヘンリー・シー・テーラー先生が日本に來られたことがあつた。犬養總理大臣が首相官邸で虐殺された夜、東京着で迎えに行くのに警戒甚だきびしくて弱つたことがあるのでよく記憶している。その時は正に日本の不況の眞最中、從つてソーシャル・ダンピング論の盛んになりかけた頃であつた。先生もしきりに、日本の生活水準を問題にして居られたらしい。ある時、先生から質問せら

れたことかあつた。即ち日本の家計調査を見ると、家計の中で米の支出金額か甚た多くて、西洋人の家計でのパンの代金にまさるものかある。こゝに大きな事實かあり、よく檢討すべき問題かあり、日本人は「主食」のために西洋人よりも大きな負擔をしているとの話であつた。ぼくは之れに對して先生に云つた。なるほと其處には多くの問題もあろうか暫らく夫れには觸れないで、そもそも兩者を單純に「主食」の範疇として比較するだけでは日本の生活の實相には觸れるものではない。西洋人の生活形態から云うならは、まさにパンは主食であるか、その外に大きな副食物費の支出かなくてはならぬ。ところか日本の米食は單純に「主食」と解釋せらるべきでない場合か多く、殊に勞働者の場合にはさような點かつよい。若しも西洋的に云うならは、よほとの程度で米は「副食」をも兼ねているものである。云いかえたならは米食は即ち食物一般であり、食物とは米食一色の感じか甚たつよいのか日本の實狀である。だから若しも先生の云われるような意味で、國際的に比較して少しでも事態の眞相に近よろうとするならは、われわれの米代に對比せらるべきものは、パンの代金だけでは不足で、之れに副食物費の何割かを加算したものを以てせねはならないのではないか。そうすれは西洋人の負擔額は、われわれの米代よりも餘ほと高額となるであろう。そうして、又その方か正しい判斷ではないかと思うと述へたことかあつた。

いまでもぼくは同し意見である。實際のところ日本人の生活、食物にとつては米の占むる地位はガリハーの如く巨大であり、他の副食物は之れに集まる小人の群の如きものかある。よく握り飯に梅干さえあれはと云われたものだか、梅干は此の場合一種の刺戟劑に過きない、化學作用に於ける觸媒の如きもので食物ではない。この場合の食物はたた米の一色である。あの戰時中から戰後の數年、銀メシ不足の頃に、外觀甚た立派な紳士か汽車の中で握り飯たけを傍若無人にガッガッ喰つていたのをしはしは見たことかあつたか、あれは日本人の食物一般のミイニアチュアに外ならぬものである。テーラー先生にあれを見せたら、なるほど一口ごとに日本人は主食と副食とを同時に食つていると破顔されることであると思う。

米は甚た便利な食物である。これだけで、人間の必要とする殆んとあらゆる榮養素か含まれている。握り飯たけで何十日も生きて居れる甚た重寶な食物である。一物を以て事か足りると云う食物は、先す第一に母親のおちちであり、それたけで小供はまるまると肥つて生長する。これに次いでは米以外にはない。パンはかり食つていたり、イモはかり攝つていたり、或いは魚たけを食つていたら、一週間目にはわれわれは弱つてしまうに違いない。こう云う意味から云えは、米は有難い貴重な食物であるとなさねばならないであろう。また斯樣な性質をもつているためであるか、米は食物として最も美味で、又最も飽きのこないものであろう。永い間の慣習で生理的にそうなつたのであろうか、ぼくは米食をしないと、とうも身體の工合かわるく胃袋か安定しない。戰中戰後、頭だけか不安定であつたのみではなかつたこと屢々であつた。

三

ぼくの胃袋は米食を欲すること限りがないが、それにも拘わらずぼくの頭はどうしても米の禮讃をなすようにはなかなかなれない。のみならず、時々は米食をみては社會的にくやしい氣にすらなることがある。ぼくの胃袋と頭とが常に反目しているのを感ずる。——

米が單一物でもつて食物の全機能を果し得ると云う事實は、便利なことではあるが同時にわれわれ日本人に對して、その消費生活の日常を通じて、甚だマイナスの効果をもたらした。それは日常的な頭腦の訓練の機會をよほど制約したことである。實際米だけ喰つて居れは夫れで萬事O・Kであることのために米さえあれは食物に就いては、人は何事も考えるの要がない精神的怠惰をもたらす。ぼくは終戰後三週間はかり、一人で暮して自炊をやつて居たことがあつた。たまたま終戰後の混亂に乘じて白米を賣りに來た奴があり、悪いこととは知りながら渇えていたので夫れを買つたが、教わつた通り中々飯がうまく出來た。しかも其の單食で結構生きていた。その事を同じ境遇に戰時中にあつた一友人に得意になつて話したら、汝は幸運な男だ、米がない自炊生活に於ける食物の調理が如何に多くの頭腦と手腕とを要するか、洵に想像に絶するものがある、こんな自炊生活をやつて居たら他には何事もする餘裕などありはしないと聞かされたことがあつた。實際一個の無器用無精のものが、頭を働かさすとも食えるのが米食である。其の單一性、淡白性、單調性は同時に無思考、無思想、ひいてはイージー・ゴーイング的不活潑を伴つて來るのである。さらに進んでは働かさない頭の硬化、硬直、停滯、諦觀、思想的不感性、思考的不敏性に至らざるを得ない。頭腦は盲腸のようなものになつて來る。貧乏で他には書物も中々讀めない日本の家庭婦人のあの頭の構造には深い由來があると、ぼくは自炊しながら、臺所の一隅でつくづく考えざるを得なかつた。ほんとうに罪ぶかいことである。

もしもわれわれが、昔から小麥を常食としている運命のもとに生れて來ていたら、如何なものであろうか。それだけを米のように喰つて居れはわれわれは結局自滅してしまつていたであろう。どうしても麥に配するに、他の副食物をもつてしなければならない。麥類は幸か不幸か食物として其の獨自性、自足性を維持し孤立することがどうしても出來なく、その補完物、補充物である友を探さなければならないのである。換言すれは、夫れは一つの大きな有機體乃至は組織體の全體の中の僅かな、一部分たるの地位を占めるものであるに過ぎない。米食が常に唯我獨存、自足自滿、孤立無緣に堪え得るのに反して、麥食は他のものとのコンビネーションを求めざるを得ないとの意味では、連帶的であり連立的である。この頃盛んに分裂しながら、しきりに連立派が多くなつたが、戰中戰後あまり米食をやらなかつた反映であろうか。

それのみではない。麥食に於ける主食副食のコンビネーションの方法には無限の可能性がある。そのために、われわれが自己の食物に思いをめぐらすとき、今夕の食物を調理せんとするときおのずから此の可能性の中から、とれかの一つを選び出さねはな

らぬ。若しくは他の幾多のものを篩い落さねばならぬ。麥食をなさんとするものは、毎日少くとも三度は斯かる選擇の場面に當面する。實際のところ人々が選擇行動をなす場面に當面したとき、彼れらの精神の最大の自由がある、彼れらは最も幸福な立場に置かれる。選擇行動―自由―頭腦の働き、ここからして始めてわれわれが行動の受動性、單純なる適應性を破つて一歩を踏み出してゆく能動的・積極的性格が生れて來るのではないか。また選擇行動によつてわれわれは事物の比較、計量に就いて教わる。そして夫れがそもそも人間行動の合理性の一面を、樹立してくる大きな根基となるのは明らかである。麥食の生まざるを得ない日常の訓練性には實際驚くべきものがある。あゝ麥食なるかな、麥食なるかな、ぼくの頭は胃袋を壓して何時も斯く叫ぶのである。

四

農業界には、昔しから愛好の一つの言葉がある。それは右に述べた米食に甚た關連の多い言葉である。曰く、自給自足。それはあらゆる場面に向つて展開せられて來ている。ます、大きな場面をとつて見れは、日本は食物たけは自給自足せねはならぬと云うのである。これは單なる言葉、フレーズだけにとどまらないで、永い間日本の農業政策を動かして來たものであつた。あらゆるものを犠牲にしても、國民の食物卽ち米だけは國内で――後にはとうにもならなくなつて、日本の勢力範圍内て――確保せねはならぬとせられたし、事實上あらゆる苦勞と犠牲との結果そうなつていた。しかし夫れは平時のこと、その必要のなかつた時には目的を達し得たが、殘念ながらその必要が最も强かつた時には――戰時中には――とうとうその目的を達し得なかつた慘狀を示したものであつた。何十年の苦勞の結果そだてた子供が、いざと云う時に親に背いてしまつたようなものであつた。日本の米作農業政策は斯かる見地から、今一度嚴密な檢討を要するものであると平常から信じている。

一國としての自給自足――この頃、昔しからの自給自足論者も夫れが到底不可能なのを知つて、自足は敢て出來ずとも自給には努力せねばならぬと云つて居るが、そんなことは云つても云わずとも同じことである。農業か一國から消えては困ると云うのと、實質は同じ叫びに外ならぬ――に就いては兎も角、それを更に範圍をちぢめて、個々の農家に就いて自給自足に向つて努力すべきであると屢々云われる。農産物價格が暴落した昭和五年以後の農業恐慌時代には、百姓が「餘計な」貨幣經濟に入り込んでいるために恐慌に直面するのであるから、出來る限り貨幣經濟、商品生産から逃避して自給自足體制に入るべきことか、政策的にも奬勵せられた。それが恐慌對策となされた。昨今我が經濟界も漸く安定し始めたか他方に於て外國食料の大量輸入の聲におびえて、農産物價格も低下し始め、ヤミ米價格は殊に低落し始め農業恐慌的現象もいよいよ迫つているが、恐らく一部のものの間には、對策として個々の農家の自給自足論か、再び擡頭して來るに違いない。開墾開拓の遂行に當つては當初はもとよりのこと、末なかく自給自足を開拓農家は其の方針とすべきであると、屢々云われて居るし、また現に夫れを極力實行しているようた。

こう云う農家指導の方針は、現實に於ては如何なる實を結んで居るであろうか。農家の自給自足なる態度は孤立して、夫れ自身で考察せられてはならぬ。具體的に農家の生產規模や、生產形態との關聯に於て之れを評價し議論すべき問題である。

ぼくは若い頃アメリカに暫らくいたことがあり、あちらこちらと田舍の旅行をした。その頃は自動車が大衆的となり、之れで旅行しドライブするものが增して來たので、幹線道路に近い農家には窓硝子や建札に「旅行者用の空間あり」(Rooms for tourist)とあり、大低一人一夜一弗で泊めて呉れた。中には少々しやれてWell come in をもぢつて Welcome inn と書いてあるのがある。ぼくも人眞似をして、自動車旅行をなして田舍でこんな百姓屋によく泊つた。ベッドは新しいシーツだし、枕ケースは眞白で全く文句はない。また大抵の農家では更に一弗を拂えは、夕食をしてやろうと云つて早速鷄をひねつてくれる。朝食はます五十セントであつた。パンも自家製、バター、チーズも左樣であるので市販のものに比べると、少々ゴツイけれども味は却つて新鮮である。ミルクも卵もハムもトマトも蜂蜜も果實も出してくれる。これが悉く自己の農場のものである。それがおかみさんの誇りでもある。僅かにコーヒーとか調味用のものが、購入品なの過ぎない。云い換えたならば、正に食物に就いて其の大半が自給品なのである。少し大きな農家になれは少々家族員が多くとも、農地の數パーセントを割けは、大半の必要品の自給自足をなすことが出來る。百姓もこうなれは羨ましい限りたと、其の頃農村を廻りながらつくつく感じたことがあつた。農村をあるき、農民と話をしていると何處の國でも好きになつて來るが、ぼくも田舍廻りをしてからアメリカが始めて好きになつた。

さて日本は如何だ。日本の小農に於ては、家族が少し餘計に食つたら全農地を擧げても寧ろ不足しやしないかとさえ思われる。仲々ヴァライェチーのある食物を生產するだけの餘地などは、到底ありはしないであろう。「主食」だけで漸くのことである。しかるに新しい開墾地などで畑作が多い場合には、單一色の農產物を食つていては生命の問題だ、どうしても自給品のみには賴れない、商品生產農業をやらざるを得ないのである。ところが米作をやつて居れば先きに述べたように、それだけで兎も角生命はつなぐことが出來る。こんな次第で結局のところ、日本の小農經濟のもとでは、米作農民こそが自給自足をなし得る資格(?)をもつて來る。ことに米作の單作地帶、例えは北陸や東北の農民の場合に然りである。單作地帶の小農に於ては、殆んどその全農地の九〇パーセント以上を擧げて米をつくり、これを以て其の食物の殆んど大半をまかなつている。自給自足論は結局斯ようなところで、始めて實行せられることとなるのである。

南朝鮮や東北の米の單作地域の小農の台所をのぞいて見給え。そこでは白米を食つている。そう云つたら配給の米の量が、昨年度は全配給量の五八パーセント(全國平均)であつた都市民はうらやましく思うかも知れない。しかし左樣ではない。彼等は白米を食つているばかりではなく、ただ白米はかりを食つているのである。畑地など殆んどないのであるから、他の食物など殆んと何もない、副食は殆んど乏しく、それを求むる餘裕はないのであ

る。それが朝晝晩とつづき、今日も明日もまた同じなのである。ことに朝鮮の農民の場合の如き白き服、白き(模様の殆んとない)茶碗、白米と白一色の世界が卓の上に、膳の上に展開するのである。――およそ斯ような背景に於ける白米食が羨ましいものであるか。そこに生活意識の明朗か生まれるか。到るところ同じ到るとき又同じ。單調、單一、無味、無色、寂寥、寂莫、沈たり痛たるものがある。人は食事にあたつて、たゞ默々としている。食卓の歡かとうしてここに生まれることが出來ようか。食事そのものが既にへいくつでありえこぢである。『土』に描かれてあるような心の世界は當然に生まれて來るであろう。私は堪えられないような淋しい氣持をもつて、東北のさる小農の食事、白米の食事を「動物的」であると感せざるを得なかつたものである。そして夫れは小農の自給自足のたゞしい姿でなくて何であろう。

畑作農家の場合は如何に小規模であるとは云え、斯ような場面をしめすことが出來ない。彼等はとうしても、雜食せざるを得ない、どうしても自給自足をやぶつて、もう少し大きい經濟交流の中に自らを投せざるを得ない。彼等が麥飯をくい、サツマイモをくうのは當然であるが、それは單に主食であるに過ぎなく、副食を求めざるを得ない。九州のサツマイモ百姓は鰯を食い、鯖を食わなければならぬ。それで榮養素が始めて全くなるのである。食卓はかくて多彩的であり、食事は話題を提供せざるを得ないのである。貧しと云えとも、沈默の食事とならずに歡をつくすことも出來る。麥食、イモ食は生理的にも同伴者を求めて連帯的であるのみではない。それを實行している家族員が、また相互に友交的社交的とならざるを得ない。彼等は自ら、小さい殼の中に閉ちこもる自足經濟をすてゝ商品流通、貨幣經濟の中に入るようにならざるを得ない。そして自家生産と購入品とを混せ合して、食卓をにぎやかにするのである。reddit mercatum parata pecunia gratum 現金取引は商業を愉快にする。いないな農業をも農民をも愉快にするのである。彼等は一日のうちで少くとも一度、勞働の後の晩飯の時には愉快になるのである。かようにして、東北の小農と九州の小農、米の單作農とイモ作りの農民、その日常生活を通して知らず知らずの間に培われているメンタリテーの大きな相違を見ないわけにはゆかないのである。

五

餘りに多辯を消費生活の方で弄し過ぎた。少しく方向を轉じて米の生産、水田農業と畑作農業とに就いて考えて見よう。そして米作の性格の一端に觸れたい。

永い間の日本の栽培面積統計を見ると顯著な事實に氣がつく。稻作の栽培面積は固定していて連年の變化が少いのに反して、他の諸作――水田の裏作をも含めて――の夫れは連年の變遷が中々多い。一般に畑作物の種類が多く、それが夫々その時々の景氣に應して栽培せられたり、中止されたりして轉々がはげしい。米の作付面積の固定しているのとは、はつきりした對比が見られるのである。米の供給函數を假りに計算する場合に――あらゆる農産物の收穫高は天候の加減を受けることが多いので、これに就いて經濟上の供給函數を出すことは攪亂要因が強くて無意味

なものとなることが多い。經濟活動を見るためには、從つて、經濟者の意志が盛られている栽培面積を資料とする方がヨリ妥當であるのが一般である――われわれは米作の栽培面積を材料として作業しないわけにはゆかないが、面積が殆んど動かないとなると、函數計算の意味が甚だ興味少いものとなつてしまう。生産物價格が高くとも廉くとも生産計畫には何等の變化もなく、或いは消費量に何等の變化もないとなると、經濟問題として之れを取扱うのが洵に面白くなくなつて來るのが普通である。そして其の裏とも云うべき經濟外的要因の究明の方に、學問的興味がとられてしまうのが普通である。

米作面積の統計を眺めていると實際のところ斯樣な次第で、第一には、日本の農民が一たん水田を手にすれば何んでも彼でも米作にしがみつき執着して離さぬと云う事態が窺われてならない。數學的に云えば、米作は變數ではなくて常數の如きものとしてあるように、何時でもぼくは感ずるのである。ここでは經濟的な範疇を以ては中々解明し得ないような問題が多い感じがする。第二に、夫れ故に、日本の米作農民は其の經濟志向を示すべくんば、この常數たる米作面積を差し引いた殘餘の裏作や畑作栽培の面に於てであるに過ぎない。僅かばかりの畑作に於て、諸作物の有利性を相互に比較し檢討して、經濟的選擇作用を之れに集中しているのではないかと思う。畑作本位の場合には一たび選擇作用の枠がかけられると、其の諸作の栽培面積にはそれぞれ連年の變化が生まれざるを得なく、經濟内的な觀察が興味をひくようになつて來るであろう。經濟のロヂックは米作でなくて、却つて畑の諸作に於て明白にうかがわれるのである。

日本の農業の諸問題に就いては、制度經濟學的な攻究が專ら多く、純粹經濟學的な究明が甚だ少いのには所以がある。後者のような種類の究明の漸く材料たり得るものは、主として畑作關係にあるのではないかと思う。例えは供給函數とか、農産物需要函數とか代用率の研究とかの如くである。――斯くして一般的に云つて米作本位の日本農業の研究は、其の對象の性格上どうも制度經濟學的な性格を帶びるようである。そう云えは敢て米作を主とした日本農業に限らぬ。他の産業界を見ても、例えば軍部と結び政府と呼應して日本の主要産業は運用されて來ていた。企業主の活動の主力は、彼れが純然たる經濟者としての夫れにあるよりも寧ろ、御用商人的に結託することに注がれていた。獨占があると云つても、夫れは經濟活動の結果として經濟内的に生れて來たと云うよりも、寧ろ特許特權を得て出來たものが通例であつた。同じく獨占と云い利潤と云つても、大分西洋の場合とでは内容に違いがある。かようなものが主力であつた日本の産業を研究の對象としていると、純粹な經濟學的攻究も張合いが少なく、結託や談合や特許やが面白い問題となつてしまい、經濟學がどうしても制度經濟學的色彩を帶びるようになつて來ると平常感じている。どうも日本經濟は米作的で未だに畑作的でなかつたようである。

六

米作への斯樣な執着には色々の因緣があると思う。

既に述べたように米が單一物として、食物一般たり得ることを

縁として日本の小農の自給作物として之れ程格好のものはない。なんでも彼でも米作へ向つて突進するのである。五、六反の水田で自給作物たる米をつくれは、その經濟活動の大半か米作に注かれてくるのは勿論である。戰前に於ける一米作農家の米栽培面積は全國平均してほゞ六反であつた。第二に、これと關聯あることでもあろうが、永い間の日本の水田の物納小作は小作農をして無理にも米作をなさしめざるを得なかつた。小作米と自家用米とを合すと小小作人によつては餘剩は殆んとない、小作米の代りに供出米となつても事柄に變りはなかろう。かくて彼等は、愈々自給體制に閉ぢこもり、貨幣經濟的な訓練から遮斷されて來る。畑地小作が既に早くより金納小作料、少くとも代金納小作料をもつていたのとは雲泥の差かある。金納は作付の自由の表現である。

米作への執着は斯くして、何と云つても農民をして經濟活動の本質――生産財の利用方向の選擇並びに之れを媒介とする合理性の感覺――に觸れることを薄弱ならしめるであろう。なるほど米作は他の耕種に比べて最も有利なものであるかも知れない。その意味で結局のところ米作に執着するのかも知れない。そう云う人もあるであろう。しかし事態の眞相はそうではなく、遠く封建の昔しから米を作つていたか故に、相變らす今日も水田米作を維持していると云つた方か適切である。盲目的に米作に突進しているのであつて、種々の可能性の中から能動的に選擇せられて最有利なものとして、米作に到達したものであるとは云い難いのではあるまいか。斯くて慣行的、回顧的、傳統的、消極的なメンタリテーか米作農民の大半を支配してくる。彼等は「まづ米作をやつて居れは安心た」と云う一つの依存的、依頼的な氣分にとらわれざるを得ない。

畑作の方は如何た。幸なことには、日本の農産物市場か漸次にひらけて多種多様の畑作物の栽培か經濟的に可能になつた明治以來すつとその勢は漸増して來た。そこで畑作の大部分は、始めから流通經濟過程に這入つていると云う、運命のもとに置かれていた。斯くて畑作農民の多くは始めから、近代的な經濟的合理性の訓練を受けざるを得ない、殊に工藝作物の場合に然りであつた。更に彼等は此の合理的精神のもとに、多數の可能な作物の中から自己の經營にもつとも適切なものを、選擇せざるを得ないのである。麥食か消費生活を通じて、經濟的訓練の機會を提供しているのと同じく、生産生活を通じて畑作か齎らす訓練の意味も明かであり、水田のしめつぽいのと違つて畑作の明朗さがある。畑地を經營するものは、常々頭の働きを要求せられてくる。米作は此の意味で精神の貧乏の象徵であるし、畑作は自由の表現とでも言い現わすことか出來る。畑作なるかなである。

加うるに畑作の技術的性格かまた水田作に比べて、右に述べたところを強くする。恁うである。農業の中で水田農業ほと自然力にその收穫か依存するものは少い。そう云つたら、少し云い過ぎであるかも知れぬか眞意は次の點にある。即ち水田に於ては、農民の平均的な手腕の差異か其の收穫を左右する程度か少なく、むしろ自然の作用の方が收穫を左右する力かつよい。たいたい同一地區の米作農民の收穫は似て居る。たゞ昨年と今年と氣候的要素

によつて、それらの農民一般の收穫が動搖するのである。これに反して同一地區、同一地味のところに於ても、畑作に於てはそれぞれの農民のもつている技術、技能によつて收穫に大きな差異が生れて來るのである。人々の頭と腕との差が顯彰され易いのは、米作ではなくて畑作なのである。——斯くて畑作は人々を驅りて能動的、積極的、研究的、競爭的たらしめざるを得ないのである。米作の場合でも、改良せられない品種よりも改良品種は左樣であるが、畑作は一層左樣であり、畑作の中でも園藝に至つては更に然りであり、畜産に至つては最も然りであろう。生産量を左右するところの、自然と人間の力とのコンビネーションの態樣が田作と畑作とでは餘程違つている。前者は素朴的、自然的であるが後者は文化的、歴史的であると爲さなくてはならぬ。ぼくは西洋農業と東洋農業、西洋農民と東洋農民、その對比が類型的に水田作と畑作との對比に顯われているように思えてならぬが、場面をちぢめて同じ日本の中でも斯かる類型的差異が見られてならない。

七

「米の社會學」の話題はこれだけには盡きない。もつと展開せらるべき場面をもつているのである。以上に於て、田作畑作の兩者がそれぞれ農民のメンタリテーを養つている仕方に、大きな相違があることを述べた。一言で云い現わすならば、事物を觀て事物を處理する頭の働に大きな差異が生れてくることである。水田農民は一事に執着的であり、事物について考えることが弱い、比較したり選擇したりする機會が少ない。かような次第で彼等は、廣く世間を見ること少なく、居村の中にその眼をひからすことが強い。加うるに其の密居的生活は、隣家の茶碗がいくつあるかに關心させても、世の中の動きに對して鈍く頭を働かすに過ぎなくせしめることが多い。かくして、自己の故郷に縛りつけられる氣持をつよく持つている。あらゆる意味でモビリテーが弱い。これと反對なのが畑作農民である。彼れは自ら考え、自ら其の腕を磨かねはならぬし、磨き甲斐がある。その意味で競爭的でもあれば獨立的でもある。畑作農民は散居的生活に堪える、武藏野や秩父地方の畑地帶の農家の散在せる有樣を觀たものは、夫れを充分に窺うことが出來るであろう。

斯して畑作農民は廣く世間に其の眼光をかゞやかす。自己の生活が餘りにみじめであるならば、その由來を考える。考えて新しき一歩を踏み出ずのである。彼れの獨立心と競爭心と選擇心とは、彼れをして居村の小さい枠の中で躊躇することを打ち破つて斷然、他郷に都市に移動することを敢てせしめ易い。水田農民の「地縛り」とは異つて彼れは其の居住地も將また職業をも變えることを意としない、その意味でモビリテーが甚だ強いのである。水田農民が外に出るのは、究極やむを得ずに出ると云うか或いは「出される」と云う受動的なものが多く、外に出ても郷土回顧的であることが多い。少し不景氣になると、始まつて來る潜在失業の地盤は水田地帶、就中水田單作地帶の家庭にあるではないか。畑作農民の離村はもつと積極的であり、行先きで自らの運命を開拓せんとする。「プロレタリアートに郷土なし」と云うことは畑作地帶を背景として始めて生れて來る大きな事實ではな

かろうか。

斯くて不平不滿を持ち、また自己の運命を拓かんとするものは、どしどし畑作地帶から外に向つて出て行くことを意としない。「山たしの女」ではなくて實は「畑たし女」か多數にある。そして重要なことは、そのために彼等の居村は、自作農であれ小作農であれ、比較的その經濟的狀態か類似して來るのである、否、居村內で餘りに大きな生活狀態の差には堪えないものか外に出て行くのである。この意味に於て畑作地帶は、農民か相互に競爭的であるに拘らず、平等社會に接近してゆく結果となるのである。水田社會か反對に斯かる排出作用をもたぬところからして、階級の差は常々維持せられ、生活狀態の差か存續せしめられてくるのである。農地改革か行われても、若しも上に述へた頭の訓練の機かない限り、依然として斯かる事態か消え去つてゆくとは云えないであろう。そこには昔ながらの、そして外觀の異る一種の階層社會を殘してゆくことにはならないであろうか。日本人の生活程度か上つたら「米をすててもつと麥を食う」かも知れぬ。農民の頭か進んだら、米作を捨ててもつと畑作に轉ずるかも知れない。日本人は餘り胃袋を重んずるより、頭を重んずる方に進みたいものである。

日本の農民離村、逆に人口の農村への逆流なと其の性格に就いて今日認識を新たにして見る要かあるし、そもそも日本の食糧政策と畑地開拓政策なと、見地を新たにして再檢討すへき要かある。この隨想の一編それを要求したい。(所長)